

最後に同書で引用された『万葉集』の「讃酒歌」から一首。

價無き宝たぐいといふとも一杯の濁れる酒にあに益まさめやも(三四五)

「價無き宝」とは仏教の「無價宝」に通じ、仏教の教えよりも一杯の酒が勝るという意味とのこと。いかなる宗教学問に対する欲求も、本当は「食」にはかなわないのかも知れない。

(四六判、二五三頁、悠書館、二〇一〇年三月、二一〇〇円)

(しらいし・むつみ 弘前大学特別研究員)

## 『新編弘前市史 資料編 岩木地区』(民俗編)

大湯 卓二

本書は、当初『岩木町史』編纂事業として計画されたが、岩木町が弘前市と合併となり、そのため既刊の『新編弘前市史』十一巻の続刊として『新編弘前市史 資料編 岩木地区』(平成二二年三月)の刊行となった。

従って、本書は旧岩木町の自治体史としての体裁をとり、考古、歴史、民俗、近現代、編年資料という各分野の資料編として構成している。

本稿では、『新編弘前市史』十一巻では、掲載されなかった民俗分野について紹介する。

本書の総頁数は、九〇七頁ほどで、その約三分の一が民俗分野に当たっている。

第V部民俗分野の編集方針を見ると、岩木地区の庶民の生活を記録するため、民俗調査を実施し、調査資料を基に編纂したとある。対象となった話者は一四四名に上る。

そこで第V部の具体的な記述内容は、民俗の一般的な民俗分類(社会構成、生業、衣食住、人生儀礼、年中行事、信仰、口承文芸)の八項目分類を用い、それに「工芸」という項目を加え、九章を八人の執筆者でまとめている。

第1章の「社会構成」は、ムラ社会と人の繋がりや機能について、第一節の家と同族(家族の形態、家族の役割、家のならわし、同族の結

合)、第二節はムラの構成と機能(村落の成立、ムラ境界、ムラの構成、ムラの運営、ムラ仕事、ムラの付きあい)の二つに分節し、具体的な説明には小見出しを設け、読みやすく解説している。特に、戦前、戦後、そして現在に至るまでの民俗変化に着目しての記述である。例えばケヤグ・キョウダイブンの見出しでは、気の合う若者同士をケヤグ、そのなかでも特に親しい人をキョウダイブンと呼んで付きあいをした。(中略)昭和六〇年代に入るとケヤグは使うがキョウダイブンは使われなくなり、戦後生まれのなかには、信頼関係で生まれたケヤグとは違う、作物の共同防除で仲間になった者までケヤグと呼ぶことがあると説明している。

第2章の「生業」は、第一節生業の概況、第二節では農業、畑作の開始から収穫までの機械化以前の農作業の内容、畑作、果樹(リンゴ、柿、セリ栽培)と多種の農業について地域的特色と実際の作業活動を具体的にわかりやすく記述している。第三節畜産、第四節林業、第五節漁業などの生産活動、そして第六節の交通・交易・運搬では、マチ場と近郊農村との交流関係についての数少ない聞き取りも記録している。

第3章の「衣食住」は、第一節衣生活、第二節食生活、第三節住生活に分類され、衣では乳幼児の服装、子どもの服装、大人の服装と小項を設け、そこで誕生から大人までの成長期にあわせ、着用する年齢ごとの衣類について述べている。食では主食、代用食、副食、保存食に分類し、それぞれの食用の方法について詳述している。しかし、個々の衣食住の説明は、具体的な詳述であるが、現在に至るまでの生活様式がどのように変化して来たのかの理由が見られない。たとえば衣類の様式の変化や

食生活の変化、生活用具の衰微など、民俗の変遷の原因についても解説を加えてもよいかと思う。

第4章の「人生儀礼」は、誕生から死に至るまでの人の一生の節目に見る諸儀礼の記述である。第一節産育では妊娠、出産、こどもの成長と祝いを第二節厄、年第三節婚姻では縁談の成立、嫁やり、嫁取り婚礼以後、第四節葬制では、死の直後、葬儀、野辺送り、埋葬、死後の供養、葬法、墓地と人の一生を時間軸に沿ってまとめている。各節ごとの個別の儀礼の展開は、わかりやすく説明され、事象についても年代的变化を意識し、聞き書き資料の採集地を明記し実証的である。たとえば、近年の埋葬方法の年代的变化では、葛原・高屋では昭和二〇年ころは火葬でも土葬でもよく昭和三〇年くらいはまだ土葬があった。葛原のある人の姑は昭和三七年に長い箱の棺で土葬したが他は火葬だったと記録し、きわめて要領よいまとめである。

第5章の「年中行事」は、家を中心とする毎年繰り返されて来た伝統的儀礼であるが、主に稲の成長の節目に行事が多かった。しかし、戦後、近代化した農業とともに専業農家が少なくなり、多くが勤め人として生活を送るようになると、家中心の農耕儀礼も形骸化してしまうのも当然のことである。

本章は正月、春・夏の行事、盆、お山参詣、秋冬の行事という季節の節目に分けて行事を記述している。しかし、個別の聞き書きを忠実に記録しているのであるが、断片的な資料または形骸化した事例については、過去の記録、現在行われているもの、行事が変化したのはいつ頃かからかなども加え、周辺地域との比較の上で行事の意味を解説してもよい

かと思う。

6章の「信仰」では、寺社、家・地域の神仏、講信仰、オシラサマ、民間宗教者、シチカムラ、その他の項目による記述である。採集資料を主としているが、個別の事例が少なく、地域の信仰的特質を把握することが難しい場合は、岩木周辺地域との資料比較を試み、民俗解説があってもよいと思われる。

寺社の項については、『旧岩木町史』を参考にするのであれば、本章では無理に取り上げる必要があるのだろうか。

7章の「民俗芸能」では、津軽地方では種類は多いとはいえない。そのなかで岩木地区の獅子踊りを中心にまとめている。調査では、伝承の消失した集落や中断、休止から復活を果たした集落も含めて記述している。具体的な記述は、概要、歴史的経緯、組織、演ずる年間の行事、唄という細目を設定し、獅子踊り集団の特徴をまとめている。しかし、一方、芸能の項目のなかにお山参詣、ねぶた、百万遍など「信仰」や「年中行事」と重複する項目が並んでいるが、この章を構成する基準がよく分らない。

8章の「口承文芸」は、話者が激減し、採集が難しいとされている分野である。冒頭に昔話、伝説、世間話との分類基準が示されている。特に導入部では、昔話が語られる場、季節、話者についての解説がみられる。伝説では水部、山の部、祠堂の部、家の部、習俗の部など地域色を捉えた分類を行っている。

9章の「工芸」では、一般に生業または民具のなかで記載される項目であるが、岩木地区はアケビズル細工・竹細工が特に盛んであったため

1章を設けたのであろう。

内容は、作られる製品の種類、製品となるまでの材料の入手から完成までの製作技術が主な記述である。

本書は、津軽において数少ない民俗誌の一つといつてよいのであるが、章ごとの記述には、それぞれ個性があり、地域の特質をうまくまとめ概説的な章や個別の説明とともに概況を設ける章、資料を羅列的に記述する章、事例についての分類が不明確なままの記述など全体的に一貫性が欠けているように思われる。しかし、執筆者の調査による資料を基に忠実に記録し、わかりやすい民俗生活の記録となっている。

本書は、民俗調査による津軽地方の貴重な民俗資料の記録である。

(A5判、九〇六＋x x iii頁、二〇一〇年三月刊、弘前市、非売品)

(おおゆ・たくじ 青森県埋蔵文化財調査研究センター職員)

## 故郷への想いを新たに

—『新編弘前市史 資料編 岩木地区』(歴史編)の刊行に寄せて—

末永 洋一

### 一 本書刊行の位相

いわゆる「平成の大合併」で、青森県内の市町村もそれまでの六十七